

# 絵本ともしっかりと親しく なるための読み聞かせ

授業づくりで役立つ本、授業とからめて生徒に読ませたい本などを紹介するリレー連載です。第一回は、高橋伸先生（札幌市立向陵中学校教諭）にご担当いただきました。



北海道札幌市立向陵中学校教諭  
高橋 伸  
1964年、北海道生まれ。北海道教育大学札幌校卒業。北海道教育大学附属札幌中学校を経て、札幌市の公立中学校教諭として勤務。

## 【ねらい】

- ・目的や相手を意識した読み聞かせを工夫する。
- ・絵本や読み聞かせのおもしろさに気づく。

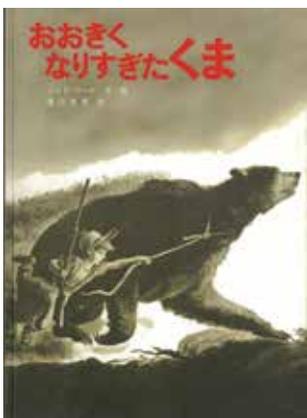
技術・家庭科の授業で絵本を読む声が聞こえてくる。教室をのぞくと、生徒が真剣に、幼児向けの絵本を手に読み聞かせの練習をしている。そんな光景が当たり前になってもうずいぶん経つ。家庭分野には「幼児と触れ合うなどの活動を通して、幼児への関心を深め、かわり方を工夫できること。」という指導事項があり、幼稚園や保育所に出向いたり、学校に園児を招いたりすることが多くなった。園児に読み聞かせをした体験が、絵本に目覚めるきっかけとなる生徒もいる。

小学校では教師による読み聞かせが盛んだが、中学校の国語ではほとんど行われないうのが現状であろう。私も「読み聞かせは（中学生が興味・関心をもたないだろうから）やっても無駄」と考えていた。しかし、生徒たちは読む側・聞く側のどちらにも非常に熱心に取り組む。読み聞かせが授業として成立する鍵は、読むだけ、聞くだけで終わらないことだと思う。

例えば『ミリーのすてきなぼうし』では、「読み終えてから園児にクイズを出す」という課題で、Q&Aを作成した。幼稚園訪問の直前だったこともあり、相手意識をもって取り組むことができた。また、『おこだでませんように』では、主人公の少年が短冊に願う事を書く場面で読み聞かせを止めて、それぞれが願う事を予想して書いてみるのも楽しい。これらは、生徒たちが読み聞かせをしたと感じる二冊である。

『おおきくなりすぎたくま』『リンドバーク 空飛ぶネズミの大冒険』は、構成や展開を味わう絵本である。絵本は短時間で読めるので、構成や展開について、その良さを発見したり、いくつかの作品を比較したりすることが可能である。

学級に置いてある絵本の中で、生徒のお気に入りには『世界で一番の贈りもの』（評論社）である。教科書（二年）で一度読んだ作品が、絵本だったことの驚きと、たくさん絵と共に味わえる喜びがあるのだろう。授業で絵本に接することができるのは、中学校が最後かもしれない。自らも楽しみながら、我が子に読み聞かせをする大人を育てたいと思う。



## おおきくなりすぎたくま

リンド・ワード文・画／渡辺茂男 訳  
ほるぷ出版／1985年

クマとの出会い、そして蜜月。それに続く悲しい結末を誰もが予想するが、ありきたりに終わらない展開が見事。どんでん返しをくろう爽快感を味わいながら、構成や展開について考えることができる。



## リンドバーク 空飛ぶネズミの大冒険

トーベン・クールマン 作／金原瑞人 訳  
ブロンズ新社／2015年

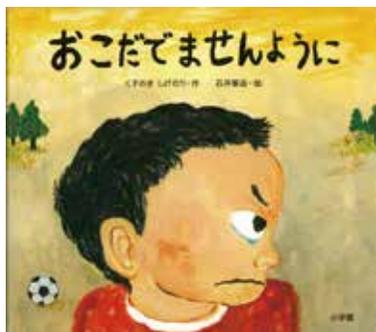
スピード感とスリルある展開の本。主人公が苦勞を重ねて夢を達成する姿は、映画を一本観たような満足感がある。この後に出版された『アームストロング 宙飛ぶネズミの大冒険』（ブロンズ新社）と合わせて読みたい。凝った装丁にも注目してほしい。



## ミリーのすてきなぼうし

きたむらさとし 作  
BL出版／2009年

小学校国語教科書（2年上巻）で教材として取り上げられている絵本。絵を指さしながら読んでいくと楽しい。幼稚園での読み聞かせでは、園児との会話が弾む。「自分だけのぼうしって何だろう」と、想像が膨らんでいく。



## おこだでませんように

くすのきしげのり 作／石井聖岳 絵  
小学館／2008年

特に男の子が共感する絵本。また、教師や親が、日常の子どもの関わりを振り返って身につまされる一冊。関西弁の発音が難しいけれど、わからないなりに一生懸命読む姿を見せたい。